

# 生活科における「表現」の教材について

石川正一\* 川口政宏\*\*

A Teaching Material of "Expression" in Life Environment Studies

Shoichi ISHIKAWA\* and Masahiro KAWAGUCHI\*\*

(1993.11.19 受理)

キーワード：生活科，表現教材

## 1 はじめに

生活科は小学校低学年を対象に平成4年度から完全実施された。山口大学教育学部は平成4年度から「教科教育法生活」と「初等科生活」が開講された。本学部においては、「初等科生活」をコース制にし、栽培、飼育、表現、影絵という4コースを設けた。「表現」コースは音楽の領域と造形の領域に分かれており、15回の授業のうち前半6回を音楽が、後半9回を造形が担当することになった。本論文では「表現」コースの造形部分について平成4年度の授業の教材について述べる。

教材を作るにあたっては、生活科の特性を尊重しつつ教員養成の立場から生活科を指導する教師の資質を学生がどのように獲得していけばよいのかという命題に正面から対処していかなければならなかった。そのためには学生が自らたどってきた学校教育のあり方を見直すことから始めなければならず、自分の受けてきた学校教育を客観的にとらえ、考察することができるのかという問題があった。そして、かつて生活科の授業を経験していない学生が、生活科をどのように受けとめ、学校教育へのイメージをどのように変革し、新たな可能性と創造力を喚起することができるのかという問題もある。これらの問題を考慮しつつ教材の作成を行った。

しかし、生活科は、平成4年度に実施されたばかりであり、成立の社会的背景や時代背景、実際の教育現場での実情を考え合わせると、まだ試行錯誤の段階であり、これから様々な議論が交わされなされながら次第に理想に近づいていくことが予想される。とすれば、本論文でとりあげる内容も、開講初年度にあたり時期尚早であるとも言えなくはない。しかし、新たな理想への第一歩と考えるならば、その試みを記述しておくこともけして無意味ではない。だが、あくまで試論としての意味合いをぬぐい去ることはできないことも事実である。生活科の「表現」についての教材も、こうした事情をふまえてのことであり、流動的である。あくまで、生活科の理念を第一義に、その中での表現に関する教育的意義をとらえようとするものである。

\* 山口女子大学附属幼稚園

\*\* 山口大学教育学美術教育

## 2 生活科「表現」をどのようにとらえたか。

生活科の「表現」コースの造形に関する教材を作成するには、まず生活科と表現との関係を明らかにしておく必要があった。特に図画工作における表現との関係は、明らかにする必要があると思われる。

表現という言葉は小学校の教育内容において、国語科では「理解」に対する「表現」として作文、朗読、談話がある。音楽科や図工科では「鑑賞」に対する「表現」があり、音楽では歌唱、器楽、創作（作曲）、図工科では絵画、版画、彫塑、デザイン、工作などがある。体育科では「表現運動」として創作ダンスがある。これらの教科は表現の意味する伝達の役割としての言語表現、造形表現、音楽表現、身体表現と結びついており、それぞれの表現手段や方法を学習することやそれら表現活動を通しての人間形成としての教育的意義がある。

生活科では表現という言葉を教科目標の5つの趣旨、

- 1 具体的な活動や体験を通す
- 2 自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつ
- 3 自分自身や自分の生活について考える
- 4 生活上必要な習慣や技能を身に付ける
- 5 自立への基礎を養う

(注1)

の1の解説部分で、「具体的な活動や体験」として「見る、調べる、探す、育てる、遊ぶなどの学習活動であり、また、それらの活動の様子や自分の考えなどを言葉、絵、動作、劇化などによって表現する学習活動」となっている。ここでは表現に関しては「言葉、絵、動作、劇化など・・・」という多様な表現方法を対象としており、児童の生活の中に生じる、遊びに伴う表現活動も対象になっている。すなわち生活科の表現は、遊びを含めた児童の生活の中にいかに教育的な意味を見いだせるかが重要である。

低学年の生活は幼児期からの連続性の上に成り立ち、やはり遊びが中心である。遊びに見られる表現には、いわゆる伝達として意識を持つ目的的な活動である場合と、伝達としての意識を持たない表出と言われる活動とに分けることができる。平成4年度から完全実施されている指導要領の図画工作などでも造形あそびという児童の主体的な造形表現、当然表出にあたる伝達意識を持たない活動についても教育的な意味を見いだしている。こうした傾向は幼児教育との一貫性につながることでもある。しかし、図画工作の場合の表出や表現はその伝達意識の有無に関わらず、芸術に向かう人間の活動を意味している。

それに対して生活科の「表現」は、我々が生命を営む上に派生する表現活動と考えてみたい。このことは我々の衣食住に伴う活動や、生活様式、あるいは社会構造など人間の作る活動である。人間は誕生して以来、様々なものを作り出してきた歴史がある。そこには人間が生命を維持し続けるのに重要な知識や知恵が働き、自然界との調和をはかりながら生存の可能性を追求してきた。こうした作りを対象としたとき人間が生存のための作る能力としてこれを保持し、さらに優れたものにしていかなければならない。そのための学習は不可欠である。我々は生存のための作る能力を「つくり」としたが(注1)、「つくり」と表現との関係には人間の目的的活動としての共通点がある。そして、作ることによって生み出される表現は、発達に即していることや、児童を取り巻く生活環境によって多様に変化しなければならない。

例えば発達と照らし合わせた場合の「つくり」は、生後から様々な人間の活動の中にそれを可能にするための発達課題が存在しているはずである。人間が最初に作り出した切る道具の多くが打製石器であるが、それを作る人間の活動を想像するなら、硬い石を発見し、石と石とをぶつけながらその破片のとがった箇所を利用して作る。このことを人間の乳幼児期からの発達課題と照らし合わせてみると、堅いものと柔らかいものとの区別したり、物と物をぶつけて壊す行為や、とがったもので突き刺したり、切る行為は、ほとんど乳幼児期に見られる。やがてそれらの散逸している経験は、ある目的的な活動として切る道具を創造する。このことが生活と主体的にかかわる中での「つくり」となって表現されるのである。

また、生活環境が人間に及ぼす表現への影響について考えてみたい。例えば物を作るための切ることや接着することは、人間の最も基本的な活動である。しかし、切ることを考えても、木を切ることと肉を切るのではまったく異なった道具があり、肉でも魚と牛ではまったく異なっている。また、国や地方によっても異なる。このように人間の切る基本は同じであってもそこから派生する道具はまったく異なっている。そこには人間の生活環境が「つくり」に影響を及ぼし、表現の違いになる。人間の持つ創造性は生活環境との密接な関係にあることも理解できる。

このように生活科の「表現」を人間の「つくり」との関係でとらえた。衣食住に関する側面から学校教育を考えたとき、新しい方向での教育の可能性もみいだせるのではないかと考える。

### 3 教材と実際の授業について

教材を作成する上で、学生の実態を把握する事ができず、生活と表現という問題と、生活科を指導する教師の資質としてどのような内容で構成するかという問題であった。先程も述べたが表現と「つくり」との関係性を明らかにしながら、学生がなるべく体験を通して主体的に生活科のイメージをとらえて欲しいと考えた。そのための基礎知識や体験をいかに授業のなかで取り入れていくかが問題であった。特に基礎知識としては、幼児と小学校低学年の造形的な発達に関わる問題、そして、幼児や児童の遊びを中心とした生活と「つくり」に関わる問題、そして、材料と表現に関する問題であった。また、体験については、なるべく自然界にある材料を利用し、生活の中で利用できる物を生み出す作りを体験させる事を重要視した。そして、授業の内容の趣旨は次の5つで構成した。

- (1) 作る体験を通して人間と材料と道具、そして生活との関係を考える
- (2) 小学校低学年までの発達に即した表現について理解を深める
- (3) 遊びと表現との関係について考える
- (4) 造形材料に対する概念を再考する
- (5) 自分の生活経験を表現に結び付ける

そして、できるだけ体験を通して学ぶように具体的に構成した。

それぞれの具体的な内容は次の通りである。

#### 1 作る体験を通して人間と材料と道具、そして生活との関係を考える・・・選択

##### ① 原野からログハウスを作る（住）

海辺に700㎡の原野があり、この土地を開墾し、ログハウスを作る。

草刈から整地をし、設計、材料調達など、全ての行程に挑戦する。

ただし、原木は提供する。前年度に台風が襲来したために山林に倒木があり、それを提供することができる。

② 羊毛刈りからマフラーを作る（衣）

羊を飼育している家庭があり、そこでは羊の毛を刈るところから、草木染め、そして紡いで毛糸を作り、編み物でセーターやマフラーを作っている。その行程に参加しながら、同時に15分の小学校低学年向けのビデオ番組を作る。

③ 針と糸だけで魚を釣って食べる（食）

大学の近くに川があり、ハヤなどたくさん魚がいる。針と糸という条件で餌や竿などは現地で調達しながら釣る。釣った魚はその場で調理をして食べる。調理方法は各自に任せる。

④ その他

学生自身がテーマを見つける。

⑤ 作って遊ぶ（以下から選択）

ア 凧作り

イ 草そりを作る

ウ 自然物でおもちゃを作る

全員が3つの中から選択となっているが、これは生活科4コース全体で山口阿武郡阿東町にある船方農場で1日を過ごすことになり、表現コースでは野外で遊ぶ遊具を作ることをテーマにしたため。

2 小学校低学年までの発達に即した表現について理解を深める・・・全員

① 幼児期の平面及び立体作品を発達に即してスライドで紹介する

平面に関しては、3才から6才の鉛筆による自由画を実際に見る。また、立体に関しては、3才から6才の土粘土の自由な作品をスライドで紹介する。それぞれの発達的な特徴について考える。

② 製作の様子をビデオで見る

自由画や粘土遊びの様子を紹介する。それぞれ幼児期の発達的な特徴について考える。

③ 自分の幼児期の絵を捜す

夏休みの課題として帰省時に、自分の幼児期からの絵を捜し、題材、材料、用具などについて調べる。

3 遊びと表現の関係について考える・・・選択

① 放課後の児童の遊びについて観察する

放課後児童はどこで、どんな遊びをしているのか。そして、持ち物や遊び道具は何か。という調査をすることで、山口市の子ども遊び場の地図や作りとの関連を調査しようとするものである。また、学生は児童と直接会話する機会を得ることができる。簡単な調査表を作った。（表1）

② 幼稚園で劇遊びをする幼児と、歌舞伎俳優を目指す幼児のビデオを見て指導のありかたについて考える。

幼稚園では教師が幼児をリラックスさせる事に終始し、幼児の表現を引きだそうとする。それに対して歌舞伎俳優は師匠が厳格に形を教える事に終始し、

幼児の表現できる限界を追求しようとする。相反する指導者の態度から表現と指導の問題について考える。

4 造形材料に対する概念を再考する・・・  
全員

- ① 紙で遊ぶ。  
ア できるだけ小さくしてみる。  
イ できるだけ長くしてみる。  
ウ できるだけ多くの穴を開ける。  
エ ハサミを使用して紙を切り落とさずにつながった状態で、できるだけ大きな面積を囲む。  
オ できるだけ手を放した状態で高くする。

5 自分の生活経験を表現に結び付ける・・・  
・全員

- ① 自分の故郷を24枚の写真で表現する

24枚の写真で、故郷をどのように表現することができるのか。また、何を伝えたいのかを考える。また、このことによって故郷に対して、自分が何を、遊んだのかについて考察をする。

以上が教材の主な内容である。

これらの教材を授業の中でどのように展開していくかが問題であった。

生活科は、教科目標のほかに、今までの小学校低学年の授業のあり方に疑問を投じている。事実、文部省小学校教科調査官として小学校指導書 生活編に携わった中野重人は「生活科教育の理論と方法」において授業を変えることを問題提起し、教師中心の授業の否定、体全体で学ぶ活動、身近な環境に学ぶなどの授業の工夫を今後の課題としている。その点では、児童が主体的に生活できる授業の在り方が重要である。そして、生活科の最終的な目標は「自立への基礎を養う」ことにある。

このようなことも配慮し、授業の展開にあたっては次のような事を重視した。

- (1) 授業は学生の主体性を重視する。  
(2) 学生の生活と授業を一体化できるような形態にする。

それぞれは非常に困難な問題であったが、新しい教科の出発において現在の社会や人間のあり方を考察するところから、教材を創造できる機会に遭遇しており、新たな挑戦も余儀なくされていると感じた。特に学生が生活と授業を一体化することができるか、ということとは難題である。

学生にとって生活をする中から学ぶということが、イメージ出来るのかが問題であった。そこで、学生自身が毎日の生活の中から主体的に生きる時間をどれだけ作り出せるのか。そして、作る活動をどれだけ生活に取り入れることができるのか。また、それを実感しながら常に問題意識を持つことができるのだろうか。などを踏まえて、授業の当初に授業形

表1 調査表

子どもの平日の遊び調査				観察者名
日時	1992年	月	日	時 分
場所	山口市			
遊びの構成人数	全員	人(男	人・女	人)
大人の有無	有	無		
年齢構成	歳から		歳	
遊びの内容				
・「なにしてるの?」と質問をし、返答をそのまま記述				
・子供が持っているもの、あるいは遊んでいる道具				
・遊んでいる様子の写真				

態と、授業内容について説明を行った。

作る体験を通して人間と材料と道具、そして生活との関係を考えるというテーマだけは選択項目のいずれかに所属することとした。ただし、④ その他を選択した学生は、自分で取り組む課題が見つかるまで授業に参加することとした。

また、この授業は教師を含め、金曜日の午後4時から5時30分までの時間は、誰もが自分の主体的な時間であることを確認し、場所にも固執せず生きるということであった。そして、いかにその時間を過ごしたのかをレポートすることとした。ただし、生活科「表現」に関する活動が条件であるから、最終的には自分が製作したもの、またはそれに類する内容の写真またはビデオを経過を踏まえたレポートを添付し提出することとした。

表現コースを受講した学生は196名中46名であった。それぞれの学生が選択した内容は次のようであった。

ログハウスの製作 9名 羊毛からマフラー 4名 放課後の調査 3名 その他 23名

その他の学生は第2週までにつぎのような問題に取り組むこととなった。

大学生の子ども時代の遊びについて調査 1名 木彫をする 6名 竹を利用して作る 3名 空を飛ぶものを作る 2名 大学生に紙飛行機の調査 4名 子どもと環境のかわり 1名 その他 6名

であった。

実際に学生がどのように行ったかについてはログハウスと羊毛からマフラーの製作までについて学生のレポートを紹介する。レポートは学生の原文のままで紹介する。

初等科生活の授業の一環として何か自分たちでやってみるという目的でログハウス作りを選んだ。実際その場所に足を踏み入れてみると、とにかく草だらけのその土地におどろいた。ログハウスを作る土地があれはとうとうない。だからまず最初に土地の整地からはじめた。とりあえず草刈り機で草を刈りまわりにある小さな木やくさった木を切りたおし集めて処分した。土地の状態に非常におわるく、ログハウスが建てられるかどうか不安であった。次の週に行ってみると土地は乾燥していたので今度はガスバーナーで草を焼くことにした。はじめはよかったのだがどんどんもえる範囲がひろがっていき、大混乱となった。あいにく横に池のようなため池があったのでそこからバケツで何度も水をくみあげやつの思いで消火することができたが、土地の方は焼畑農場をするような一面真黒な土地になってしまい、これからいったいどうしたらいいのかとみんなで土地をボーッとながめるだけであった。その後夏休みに入ってしまった、みんなが集まらずログハウスを建てるという当初の大きな目標は土地をならすだけで終わってしまった。

他の学生のレポートも同様の内容である。計画性の無さへの反省と、問題解決場面での対応に苦慮している様子が伺える。しかし、学生の中には計画の場所に行くたびに草が生え、自然の驚異に圧倒させられたことや、大勢で汗を流した事に対して、いい体験であったと述べている。

また、羊毛刈りからマフラーまでの学生はビデオ製作を行った。その内容は、泥まみれになって羊を捕らえて足をおさえる学生と、鋏で毛を刈るところから始まり、途中で羊に

尿をかけられたりしながらの死闘の場面が繰り返される。(写真1)次に泥や糞尿で汚れた毛を洗剤の入っているぬるま湯で、毛を一本一本ほぐすように洗う。それをクローバーで染色する。そして、紡ぐ。ここでも苦闘を演じている。そしてできた毛糸を使ってマフラーを完成させている。半年間に8回出かけ4時間程度の映像を収録し、20分程度に編集されている。ビデオ編集にも数日間を要している。しかし、タイトル画面やアフレコまでにはならず、ドキュメントタッチの作品になってる。



学生たちは最終的な完成をかなり高いレベルにおいてあるようだが、機材の限界に悩まされているようである。男女2人ずつの4人であったが、勝手な願いを快く了承していただいた家庭との日程を調整しながら、完成させている。自然の材料でマフラーを作る過程や、課題を自分たちの生活に取り入れて、自主的な取り組みをしていた。

講義に関しては、次のようなタイトルでおこなった。

- 第1回 人間と動物の「つくり」について
- 第2回 表出と表現について
- 第3回 作る Part 1 切る、削るなどで作る
- 第4回 作る Part 2 付ける、重ねるなどで作る
- 第5回 魚を釣って食べる
- 第6回 幼児の平面作品と立体作品
- 第7回 表現の指導 幼稚園先生と歌舞伎の師匠
- 第8回 イメージと関連付け
- 第9回 自分を生命のサイクルにもどす

講義は2回以降4～5名程度であった。第5回と第6回は全員授業に参加する予定にしていた。しかし、第5回では直前に雨になったためか参加者は無しとなってしまった。第6回はほぼ全員が参加した。それ以降は20人程度の学生が自主的に講義に参加した。

その他を選択した学生は活動の内容が決定した時点で申し出るようになっており、最終的に講義を選択した学生は6名程度になった。自から活動の方向を決定した学生は、生活科の意図とは多少異なるところも見受けられたが、自主的な姿勢を考慮し、生活の中に課題を持ち込むことになったのではないかと考える。

#### 今後の問題及びおわりに

変速的な授業形態で十分な授業をすることが困難であった。しかし、教師を含めた表現コースの課題をもった人間が、それぞれの課題を生活の中で維持し続けることは大変な労力が必要であった。それだけに、成就感を味わえた学生もいるであろうし、失敗感で終わった学生もいることであろう。教材を作るにあたって、様々な思いを巡らした割には十分な成果をあげることが出来なかったように思っている。

そして、教材を作成するに次のような問題点を感じた。

- (1) 学生の実態を把握することに十分ではなかった。
- (2) 造形的な作りだけでなく、総合的な表現につながるような基礎的な活動に対する教材研究が不足しているように感じた。

また、授業を通して次のような問題点を感じた。

- (1) 授業形態を分離したことで、学生の動静を把握することが困難であった。
- (2) 限られた時間の中で、生活観のある題材を提供することは非常に困難であった。
- (3) 学生の主体性についてもっと深い理解をする必要性を感じた。

授業を始めるにあたって、最大の悩みは学生の生活経験をどのように理解すればよいのかである。学生へのイメージは高度経済成長から情報化の時代に生まれ、校内暴力や登校拒否という問題を間近にしながら受験戦争をくぐり抜けて来た世代であり、周囲の自然は破壊され、核家族が進む中で、教職を目指す学生とは。といった一般論で、十分な情報や資料を入手することは困難であり、全てが予測の域を脱しきれなかった。そして、生活科の目標とする趣旨と照らし合わせたときに、学生に何を期待し、授業の趣旨として何を伝えなければならないのかという問題を限られた時間の中で消化することの困難さも感じた。しかし、これからも永遠に続くであろうこれらの問題は棚上げとし、教材の作成を行った。

学生にとって賛否両論を覚悟した授業であったが、いままでの学校教育の中で最も意義があると感じるか、そうではないのか。そのどちらかでありたいと望んだ。生活科という新しい科目の誕生は、何か違うことを学生に予感して欲しい思うからである。学校と自分が分離するのではなく、一体となって生活するなかに、今までの学校教育では見えなかった人間の価値のような側面がみえるのでないだろうか。そのことが将来の学校教育のあり方に新たな方向を見いだせることを期待したい。

注1：文部省 小学校指導書 生活編 教育出版 1990P.7

注2：石川正一・川口政宏 生活科における「つくり」の意義 I 山口大学教育学部研究論叢 第42巻 第3部 1992P.253～P.262

## 参考文献

- ・中野重人 生活科教育の理論と方法 東洋館出版社 1990
- ・真鍋一男 宮脇 理監修 造形教育辞典 建白社 1991
- ・宮本光雄 生活科の理論と実践―授業づくりから評価活動まで― 東洋館出版社 1990
- ・文部省 小学校指導書 生活編 教育出版 1990
- ・文部省 小学校指導書 図画工作編 開隆堂出版 1990
- ・石川正一・川口政宏 生活科における「つくり」の意義 I 山口大学教育学部研究論叢 第42巻 第3部 1992
- ・遠藤ケイ 道具術 岩波書店 1990
- ・細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清 新教育学辞典 第6巻 第一法規出版 1990